

1 「学力・学習状況調査」に基づいた学力向上策

(1) 全国・県学調の活用・分析（算数を中心）

全国学調・県学調の分析を全教員で行い、その分析結果や課題を、日々の授業づくりや学校課題研究のプロジェクトチームの活動に生かしている。

①全学年を通して

無回答率が低くなり、自分の考えを書くことができるようになってきている。これは、昨年度からの自力解決（教材の対話）の時間を重視し、その後に小集団での対話的学習を行う学習の効果が表れているとも考えられる。

また、今後も問題解決学習を通して、見通しをたてたり、ヒントカードやヒントタイムを取り入れたりして、全員が自分の考えを書けるようにする指導を継続して実施していく。

②4 学年

学年全体の学力は、全領域において県平均を上回っている。全体を引き上げていく指導を行いながら、苦手な児童に対する個に応じた指導を充実する。

③5 学年

学年全体の学力は、全領域において県平均を上回っている。最も苦手とする児童の学力の向上が課題であるという結果が出た。日々の授業についていくことが難しくなっていることが意欲の低下を招いていることのひとつと考える。少人数習熟度別学習できめ細かな指導を行ったり、少人数指導支援員等を活用して個別支援を行っていく。

④6 学年

学年全体の学力は県平均を上回っており、学力を伸ばした児童の割合も高い。また、算数が得意、普通、苦手のいずれの層の児童も学力を伸ばしている。今後も児童の学習意欲を大切に、更に全体を引き上げていく指導を行う。

(2) 分析結果に基づいた具体的な方策

①基礎・基本の定着

- ・朝学習「はなまる算数」を週2回設定し、「1～6年計算確認テスト」や「コバトン問題集」等に取り組んでいる。
- ・授業時間内に、適用問題を解く時間を確保する。
- ・現時点で苦手意識を持っている児童に合わせた基礎・基本のドリルを選定し、授業や宿題等で全児童が仕上げられるよう指導している。ドリルの丸付け、採点を教員

が行うことで、児童の理解度を把握し、きめ細かく指導に当たっている。

②思考力・判断力・表現力の育成

- ・見通しを立て、自力解決の時間を確保することで、自分の考えを持てるようにしている。
- ・授業の「振り返り」を必ず見て、必要に応じてコメントも入れている。

③学習意欲の向上（習熟度別学習を中心）

- ・3年生以上では、既習内容の定着に差がある単元について行っている。
- ・単元毎にレディネステストとコースの希望を取り、担任と算数少人数担当で話し合い、コースを決定する。定着度とコース希望に隔たりがある場合は、個別に児童と話し合い、本人が納得し、頑張れるコースに決定する。コース選択では児童のやる気を最大限に尊重する。
- ・必要に応じて、単元の中でコースを変更する場合もあるが、高学年は自分の力を伸ばせるコースを選べるようになっている。
- ・コースによって、解決までのプロセスや取り組む学習量を変えている。

〔コース1〕

いろいろな解法で確かめる。いろいろな考えを比較・検討する。

ドリル・教科書問題→多様な問題や発展問題に取り組み、更に力を伸ばす。

〔コース2〕

見通しを手がかりにして自分の考えを書く。いろいろな考えを知る。

ドリル→教科書問題に取り組み、理解を深める。

〔コース3〕

先生やみんなと一緒に答えを導き出す。部分的に自力解決を取り入れる。

ドリル→教科書問題の一部に取り組み、「わかった」「できた」を味わわせる。

授業時間内の指導だけでは理解が不十分な場合、算数少人数担当や学習支援員が授業後、給食準備時間等を活用し支援している。学習した日のうちに支援できることが望ましいと考えている。

④家庭学習の推進 ジャンプアップタイム（家庭学習）の取り組み

- ・家庭学習の習慣をつけ、学力の向上を図る。
- ・自ら進んで課題を見つけ、学習に取り組めるようにする。
- ・「ジャンプアップノート(家庭学習ノート)」が1冊終わると、校長が『がんばり賞』で児童一人一人を表彰する。
- ・「ジャンプアップノート」のよい取り組みは「ジャンプアップコーナー」に掲示し、校長がスペシャル賞』で児童一人一人を表彰する。

2 教員の指導力向上について

(1) 学習指導に関する共通理解

- ①全校で1単位時間の学習の流れを統一することで問題解決学習に取り組んでいる。
- ②全校でノート指導の型を作成し、ノート指導を徹底している。
- ③3名の支援員と、毎日、連携をとり、指導に一貫性をもてるようにしている。
- ④担任と算数少人数担当で評価方法(1単位時間・単元を通して)を確認している。
- ⑤昨年度の研究内容「P J 通信」に載せ、全教員に発信している。(資料1)

(2) 研修を通して、全教員の指導力の向上

- ①学校課題研究を算数として、以下の主題を設定し、研究を進めている。

資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業の在り方に関する研究
～深い学びの実現を目指す算数授業を中心とする教育活動の工夫・改善～

- ②1人1回、指導案を作成し、指導者を招いての研究授業を行う。
- ③全体授業研究会…全教員で授業を参観し、指導者を招いて、年4回実施する。
- ④ブロック授業研究会…校長・教頭・教務主任・P J 教員・該当ブロック教員で授業を参観し、研究協議を行う。
- ⑤2～3ヶ月毎に各種プロジェクトチーム(P T)を立ち上げ、算数を中心とする教育活動の工夫・改善を行っている。

[よりよい人間関係作りP T]
学習規律、各種S S Tの紹介(プリント集作成)や全体研修
[「聞く」の徹底P T]
「話の聞き方」掲示物作成、「聞きとりプリント」の作成
[授業参観チェックリストP T]
研究授業チェックシートの作成

(3) 指導体制の工夫と構築(学力向上P J 教員の時間割)

	月	火	水	木	金
1	3年	4年	5年	5年	6年
2	2-2	6年	1-1	3年	4年
3	6年	2-1	3年	4年	2-2
4	4年	3年	6年	1-2	5年
5		5年	4年	6年	3年

3 「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善

(1) 課題の提示と見通し、まとめ

- ①問題提示後には、必ず「昨日までの学習と違うところはどこ？」と発問し、児童の言葉を使って課題をたてるようにしている。
- ②必要に応じて、答えの見通しややり方を見通しをたてるようにしている。
- ③本時の目標と課題とまとめの整合性をとる。
→教材研究の際、評価を最初に考える
①評価 ②目標と課題 ③まとめ ④学習内容 の順に授業を組み立てる。

(2) 主体的・対話的で深い学び実現への具体的な策

①主体的な学び

- ・自力解決の時間を確保する。(教材との対話)
- ・数学的活動を意図的に取り入れる。
- ・いくつかの方法で答えを確かめさせるようにしている。

②対話的な学び

- ・自分の考えをもって、ペアトークやグループトークで考えを交流させる。一方向の発表会にならないよう、具体的な視点を与えている。(子ども同士の対話)
- ・対話の相手の明確化(教材と、先生と、子ども同士)
- ・話合いの視点の明確化
「何のために話し合いをするのか？」→考えの共有、序列化、確かめ 等
- ・話合いでは、お互いの考えを比較検討しながら他の児童の考えを取り入れ、自己の考えを広げ深めていけるようにする。
- ・他者との対話による多様な見方・考え方の育成

③深い学び

- ・練り上げの場面で、話し合いが深まるように、序列・並列・統合のどの型でまとめるのか、しっかり教材研究をしておく。
- ・児童の発言に対して切り返し、問い直し、考えさせる場面をつくる。
- ・児童の言葉を使ってまとめたり板書を参考にして自分でまとめを書いたりさせる。
- ・振り返りの時間を必ずとり、本時の感想を書かせ、数人に発表させる。教師は全員のノートに目を通し、丸を付けたり、コメントを書いたりして励ましている。

(3) ICTの活用

①デジタル教材の活用

図形やグラフ指導等、視覚的にとらえさせたい学習場面では、必要に応じてデジタル教材を使っている。

②発表における活用

提示装置を使って児童のノートを投影し、考えを発表させている。